〔愚管抄六〕承久四年九月卅日、はゝき星とて、久しく絶たる天變の中に、第一の變と思ひたる彗星いでゝ、夜を重ねて久く消ざりけり、世の人いかなる事かとおそれたりけり、〇略中御つゝしみはいかゞとて有程に、同十一月十一日に、又出きにけり、そのたび司天のともがらも大に驚き思ひける程に、上皇〇後鳥羽信を出して御祈念など有けるに、御夢の告の有けるにやとぞ人は申ける、忽に御譲位の事を行はれて、承元四年十一月廿五日に受禪〇順德の事ありけり、〇略中誠にも彗星この御譲位の事にて有ければにや、上皇の御つゝしみは、いともなくてやみにける也、

〇按ズルニ、後鳥羽天皇、久シク順德天皇ノ受禪ヲ望ミ給フ、會彗星ノ變アリシカバ之ヲ以テ辭トシテ、土御門天皇ノ御譲位ヲ促シ給ヒシナリ、

〔梅松論上〕爰に後嵯峨院、寛元年中に崩御の刻、遺勅に宣く、一の御子、後深草院御即位あるべし、おりゐの後は、長講堂領百八十ヶ所を御領として、御子孫永く在位の望をやめらるべし、次に二の御子、龜山院御即位ありて、御治世は累代敢て斷絶あるべからず、子細有に依てなりと御遺命あり、依之後深草院御治世、實治元年より正元元年に至までなり、

〔增鏡六おりゐる雲〕そのとし〇正元元年の八月廿八日、春宮〇龜山十一にて御げんぶくし給、御いみな恒仁ときこゆ、世の中にやう〳〵ほのめきゝこゆる事あれば、御門〇後深草はあかず心ぼそうおぼされて、〇略中十一月廿六日、おりゐさせ給に、空のけしきさへあはれに雨うちそゝぎて、物がなしく見えければ、伊勢のごがあひも思はぬもゝしきを、といひけんふる事さへいまの心ちして、心ぼそくおぼゆ、うへもおぼしまうけ給へれど、劍璽のいでさせ給ほど、つねの御ゆきに御身をはなれざりつるならひ、十三年の御なごり、引わかるゝはなほいとあはれに去のびがたき御けしきを、かなしと見たてまつりて辨内侍、